

第2分科会記録

I 質疑応答および研究討議

【事例発表1について】

- Q1：地域学校協働本部の中でふれあい学級の存在が大きい。詳しく教えてほしい。
(仙台市教育委員会 勢藤さん)
- A1：20年前に始まった。地域のお年寄りが12人くらい学校に集まり、当時は7年生のような感じで子ども達と交流を行っていた。世代交代が進み、今は第二期に入った。主な活動としては、花植え、草むしり、七夕の飾りつけ、団子下げ、味噌づくりなどを行っている。(二瓶さん)
- Q2：人材の確保について。二瓶さんが声をかけているのか、学校でアンケートなどを取っているのか教えてほしい。(新庄市 放課後子ども教室関係者)
- Q3：先生方の手伝ってもらいたいという要望と地域学校協働活動の支援員さんをつなげているのは、二瓶さんがしているのか学校の先生がしているのか。(新庄市 放課後子ども教室関係者)
- A2：人材の確保は私がやっている。事業の内容によっては、各家庭にお手紙を出して保護者などに依頼し、足りないところは私が声をかけている。依頼の内容については、地域の活動団体に声をかけてまとめて依頼することもある。また、依頼の際に「お友達と一緒に来て」と言って誘い、人数を確保している。(二瓶さん)
- A3：先生方の願いと地域の支援員さんをつなぐのがコーディネーターの仕事。私が先生方一人ひとりに、年度当初聞き取りを行っている。何人必要か、どんな助けが必要かなどを聞き、地域の人々に依頼をしている。(二瓶さん)

【事例発表2について】

- Q1：協働型の学校評価目標について、設定手順や評価改善についてお聞きしたい。また、評価の実施のタイミング、改善策の検討についてはどのようにしているか。(山形県朝日町立宮宿小 秋葉校長)
- A1：学校運営協議会の中で、地域の方、保護者の方、学校側の意見をすり合わせて作っている。評価のタイミングは、保護者にアンケートを取るとともに、地域の方々にもアンケートを取っている。年度末に学校運営協議会でアンケート集計結果を提示し、次年度の目標につなげている。(水口教頭)
- Q2：キャンドルナイトについて、会議や打ち合わせの負担増が考えられるが、運営についてどのように行っているのか、また予算をどのようにしているのか。(山形県朝日町立宮宿小 秋葉校長)
- A2：キャンドルナイトは年々参加団体が増えてきている。地区に商工振興会が立ち上がった。イベントが盛り上がるので、賛同団体が増えている状況。会議については9月に役員会にて日程の決定、10月、11月はスタッフやボランティアが集まり、具体的なキャンドルの配置を検討する。その後それぞれの担当に分かれて危険がないかどうか確認を行う。合計で4～5回の会議を行う。本番は11月下旬の土曜日。予算については、市の連合会と市民センター館長さんにも協力をお願いし、太白区中央市民センター地域連携ネットワーク事業から2～3万の助成金をもらっている。小中学校PTA、西中田放課後子ども教室からも予算をもらっている。キャンドルナイトイベント自体には、お金はあまりかからない。(石橋さん)
- Q3：野外でのイベントだが、雨天の場合はどのようにしているのか。また、キャンドルについて、紙コップの中がどうなっているのか聞きたい。(山形県遊佐町 推進員 那須さん)
- A3：雨天の場合は順延する。天気予報により開催を12月に先送りしたときもあるが、12月は風が強い。土曜日のみ雨天時は次の日曜日に行っている。今年度は土日両方とも雨の場合は、2月か3月に順延し開催することにしている。キャンドルの作り方については、紙コップにイケアのキャンドルを入れている。さらに風で飛ばないように砂を入れている。(石橋さん)

【研究討議】

- Q:地域学校協働本部は地域づくりをより強く進め、学校支援本部は学校支援が中心だが、どちらの事例発表も、学校支援活動のはずだが、「学校を通して、大人のつながりを創る活動」をしているようにしか見えない素晴らしい事例。いろいろな人が参加して活動することはとても大変だが、これらをしっかり実践しており、多様な主体との交流が実現している。二瓶さんと石橋さんのお二方に「人とのつながり」をどのように意識されていたのか聞きたい。(廣瀬先生)
- A:「いろいろな人に声をかける」ことを意識している。同じ人にばかり頼むと閉鎖的になってしまうから。学校に共有スペースがあり、お互いに声を掛け合えるような場も作っている。私だけでなく、支援員同士でつながりを広げられるようにしている。(二瓶さん)
- A:人と会う時になどにアンテナを立てる。例えば、町内会長の話を聞いて子どもとお年寄をつなげる活動を行ったりするときがある。その場で、来てくれた民生委員や福祉委員と会い、たくさん話をするようにしている。放課後子ども教室にも地区の方がたくさん参加している。その方々とのつながり、更につながりの輪が増える。(石橋さん)
- Q:地域学校協働活動とPTAとの関係について、どのようにとらえているか、秋葉校長先生にお聞きしたい。(遠野市教育委員会)
- A:PTAの活動も、地域学校協働活動の一つと捉えている。(秋葉校長)
- Q:小国町では小中校連携で活動を行っているが、詳細をお話いただけないか。(進行)
- A:小国町内の小中高校4校とも学校運営協議会が設置しており、合同の協議会もある。この会議では、地域づくりについて必要なものなどを検討する。高校生が小学校協議会に入り、小学校の在り方に意見を述べるなどしている。(小国中学校 今校長)

II 助言

地域づくりの担い手育成についてはとても重要な課題である。アドバイザーをしている佐倉市の各学校運営協議会のメンバーに、その小学校の卒業生を委員にしたほうが良いと助言した。指導主事が実際に動き、現役の高校生が実際に学校運営協議会に入っている。高校生が入ると雰囲気が一変する。高校生に聞かせるような話し方になる。

栃木県の国府南小学校では、学校運営協議会とは別に、「コミュニティスクール運営委員会」という会議を立ち上げた。校長の名前で地域に手紙を書き、「子どもと地域の未来を考える会」をしたいというお願いをしたところ、38名の申し込みがあった。会議では学校教育目標を地域の人たちがどのように達成させるか、3ヵ年計画を立てた。これは地域学校協働本部そのものである。これに中学生や高校生を参加させたいと考えていたところ、その学校の卒業生が、友達と2人で参加してくれた。中学生も参加するなどその後人数も増え、今では中学校の校長が生徒を何人か連れて参加してくれている。このように次の世代を巻き込んで地域づくりをしていくことは極めて重要ではないか。「人のつながりをしっかり作ること。」「地域づくりの担い手育成」の2つが柱となる。

高島の事例について。ベースに学校支援地域本部がある。丁寧な学校支援から始まり、「高校生の参画」や「支援を通じた自己教育(大人の学び)」につながっている。子どもの体験活動は、社会に出てから大きなインパクトとなって表れる。今、子供の体験活動に参画することは未来を創ることである。

柳生小学校の事例について。かつて地域の中学生が小学校へ出前講座に行っていたケースがあった。仙台市は昔から、各学校に嘱託社会教育主事をおくなど地域とのつながりを大切にしている。キャンドルナイトでは学校と公民館だけでなく、市民センターや自治体、各団体など様々な人をつなぐ活動である。「人と関わるのが楽しい」「情報交換することでネタを見つけた」などアンケートの声は、地域づくりそのものの魅力である。

コミュニティスクールや地域学校協働活動は、今やっていることを大事にしながら、新しいことを加えて事業を展開していくべき。地域の実態によって味付けを変えていく。新しく始める時は、マニュアルを見るのではなく、今やっている地域学校協働活動探しをすること。「1+1は太った1にする」ことを大切にしていきたい。